

## 学期始めの天津外大を訪れて

日本文学文化学科 准教授 楊 昆鵬

平成 30 年 10 月 8 日

本学の教員派遣を受け、九月十二日から十九日にかけて中国天津外国大学で正味五日間の集中講義を行った。受講者は日本語学院の大学院生十五名で、日本古典文学・日本近現代文学・日本文化と三つの分野を専攻しており、九月から修士課程二年に進級したばかりである。すでに一年の基礎的な訓練を受けたこともあろう、彼らは講義を理解する日本語力や文学史の基礎知識を身に付けてあり、終始たいへん意欲的であった。彼らが中国で受けた日本語教育には漢文の内容がなく、大学院でも訓読に関する授業が少ないという。勿論これは天津外大だけに限るわけではなく、カリキュラムに組み込まれていないのが一般的ではなかろうか。中国人は中国語で漢詩漢文を古文として読めてしまうが、訓読法となると普通の日本語とは違う難しさがある。中国で日本語教育を受けた私自身は、その事情を多少把握しているので、今回の集中講義はまず日本語と日本文化における漢文学の重要性を強調することから始まり、中高の漢文教育の状況を触れた後、訓読法の基礎を説明し、平安期の漢詩文作品を取り上げて講読を行った。また研究方法の参考として和漢比較文学の問題をいくつか具体例を示して解説した。五回にわたる集中講義の延長として、「和漢聯句における古典受容—論語・杜甫・源氏物語—」という題目で講演を行った。これには大学院生全学年と学部生も含め、合計五、六十名の学生が集まった。最終日に取った授業アンケートの結果から見ると、今後日本語や日本文化の専門家になろうとする彼らにとって漢文学教育の重要性と需要の切迫さに改めて気づかされた。

今回の滞在は、ちょうど新学期が始まる時期にあたり、激務の中、日本語学院院长の朱鵬霄先生をはじめ、副院長の劉澤軍、田泉両先生たちは、面会の機会を設けてくださり、これまで両大学の交流の伝統を振り返りつつ今後の課題にも触れた。また授業の日程調整や資料の準備などはもっぱら日本語学院若手教員の任先生のお世話になった。TAを務めてくれた大学院生の王さんも実に要領よく動いてくれた。

久しぶりに活気が戻ったキャンパスに、かさばる荷物を持ち歩く新入生のあどけない姿がよく目につく。一方、すっかり馴染んでいる上級生たちは早朝から朗読したり夜まで運動場で球技を楽しんだりして、早速大学生活が軌道に乗った様子である。全寮制の徹底によって学生たちはキャンパス内でほとんどすべての時間を過ごし、それで学習時間が確保され、人間関係も築かれてゆく。そのライフスタイルに、コミュニケーション力やモチベーションなど、日本の大学生に不足しがちな能力を育み鍛える仕組みが潜んでいる気がする。そんなことを、現在天津外大に留学している武蔵野大学の学生たちも口にしている。九月から天津外大大学院に進学した河原さんや、協定留学生の谷さんなど四人と懇談する場を設けたが、

日本と全く異なる学生生活を体験することで中国の学生たちの持つ強みや、中国の文化に対する理解が深まったという。その一方、キャンパス内に止まらず、外にも出て社会をより深く理解できる機会もほしいという考えも抱いている。

昼間は暑い、朝晩は肌寒い華北地方の九月。天津外大が位置する馬場道は、他の四本の通りとともに「五大道」と呼ばれ、二十世紀の最初はイギリスの租界で、政界財界の著名人が居住していた英国風の重厚かつ瀟洒な洋館屋敷が軒を連ねており、現在は歴史的建築物として保護され、天津を代表する観光名所となっている。大学近くに図書大厦という本屋の高層ビルがある。一階から七階まで広大なフロアを持ち、中国の古典名著から日本の人気作家の翻訳書まであらゆる分野の書籍を取り扱っており、平日の昼にもかかわらず多くが訪れている。歴史を刻む欧風建築と近代的な高層ビルが映え合う光景、首都北京に近いゆえの伝統と港を持つ開放的な姿勢、それが天津という街の個性かもしれない。